

AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から（2）」2019年度第1回研究会（通算第1回目）

日時；2019年7月13日（土）14:00-18:30、2019年7月14日（日）9:30-12:30

場所：東京外国語大学本郷サテライト7階セミナールーム

主催：AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から（2）」

出席者：鶴田 格、石川直樹、小松かおり、安溪貴子、杉山祐子、杉村和彦、田中利和、松田正彦、足達太郎、佐藤千鶴子、泉 直亮、原子壮太

報告1. 杉山祐子（AA 研共同研究員，弘前大学）

「社会的プロセスとしてのイノベーション：ベンバにおける事例」

本報告は、ザンビアのミオンボ林帯にすむベンバ人の在来農業システムの変化を、フォークもしくはローカル・イノベーション・ヒストリー（FIH/ LIH）の視点から見直してみる試みである。同時に、農民と環境の相互作用がもたらす、それぞれの農法に固有の景観が形成されるという点にも着目した。FIH/LIH の視点から過去 100 年間にわたるベンバ農業の技術革新を検討すると、在来農業は農民による絶えざる技術革新の蓄積からなっていることがわかった。また農民のイノベーションは、（1）トップダウンではなく個別的多発的におこなわれ、ヨコの社会的つながりによって普及していき、また（2）多くの選択肢を確保しつつ技術体系の変化が進行するという特色をもっている。社会的プロセスとしてのベンバのイノベーションの重要な点は、さまざまな生産資源が特定の個人や集団によって囲い込まれず、アクセスが開放されており、いわば資源が常に「社会化」されるベクトルが働いていることである。こうした動きは、長期的な生活の安定を重視するベンバ社会の指向性と無縁でないと考えられる。

報告2. 鶴田 格（AA 研共同研究員，近畿大学）

「アフリカ在来農業革命/イノベーションを考えるための理論的枠組み：杉山イノベーション論を手がかりに」

本報告では、まず報告1にあった杉山のイノベーション論の特徴を整理し、それがイノベーションを単なる技術変化という視点でなく、社会的プロセスとして描いていることを強調した。同時に、生産部門だけでなく消費部門も含めた新しい経済体系の創出としてイノベーションを捉えていることにも着目した。さらに、杉山のとりあげるベンバの事例が古代農

業革命以前の「自然社会」としての特徴をよくあらわしていることを、アジア社会のイノベーションや農村変容の在り方と比較しながら議論した。また社会的なプロセスとしてのイノベーションを具体的な事例に即して論じるために、タンザニアの農牧民ゴゴの社会をとりあげ、牛耕と乾季の野菜作の導入という、近年おこった二つの主要な生業上のイノベーションに関して、その普及プロセスが杉山の提示した枠組みに当てはまるかどうかを検討した。どちらのイノベーションに関しても、ウシという資源、あるいは川沿いの土地という資源をそれぞれ所有する者が、所有しないものへのアクセスを開放することによって、「持たざる者」もイノベーションに参加することを可能にしていた。最後に、これまで豊富だった土地がますます希少になっていくなかで、アフリカ的な農業集約化にはどのような可能性があるのかを論じた。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.